

ネパール、今、昔（40年前の協力隊時代と2022年）

元青年海外協力隊ネパール（1981-1983）果樹栽培・コシ県ボジプール郡 長谷川隆

40年前、町から2日歩いてかかる標高1400m程の大斜面の山の村で2年間生活した。電気、ガス、水道、便所、風呂、電話、自転車も新聞もない村だった。今は車の道路ができ電気も来ているという。しかし若者が村を離れ田畑は荒れ家々も減ったそうだ。カトマンズで会う多くの人が、兄弟、子供、親戚の身近な人が外国で学んだり働いている、と言う。そして携帯電話をほとんどの人が使っている。トレッキングに行くのは外国人だけだったのが、今はネパール人もとても多くなり、学生が30人のグループで7-8日行くのも一般的になったようだ。GDPは10年で2.5倍になり、カトマンズの土地は4年で2倍になり、街は車とバイクで激しい渋滞になっている。昔は日本の援助が大きかったが、今は外国からの投資で中国が48%も占め、インド製バイク、中国や韓国の携帯、PC、テレビ等がひしめく。

こうした中、40年前の山村の生活を振り返り、8回のネパール訪問を通じての見聞から、ネパールの今と昔を纏めてみた。

- ・ヒマラヤの成り立ち：アフリカ大陸からインド亜大陸が毎年15cm移動してユーラシア大陸にぶつかり、押し続けてヒマラヤ山脈ができ、チベット高原ができた。



アンナプルナサウス 7219m、ヒウンチュリ 6441m、マチャプチャレ 6993m



ダウラギリ I (8172m)

- ・気候：カトマンズは標高1200mで、静岡から真夏と真冬を除いた温暖な気候。雨季が6-9月でそれ以外は乾季。インド国境のタライ平原は標高が低く、非常に熱い。
- ・標高と住居：標高100m（南部平野部）から2500m位に多くは住む。稲作は標高1400m位まで。それ以上は四国ビエ、ジャガイモなど。一つの村で標高差900m以上もあり、家々がちりばめるように見られる。2000mでクルミ、800-1200mで蜜柑、それ以下で

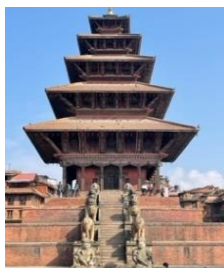
パパイヤというように北海道から沖縄までの作物が一つの村で収穫できた。



- ・民族：インド亜大陸からのアーリアン系（色黒、顔の堀が深く足が長い）とユーラシア大陸のモンゴリアン系の民族が混じり、100以上の民族がいるという。民族ごとに衣装、言葉、祭り、食習慣など異なる。
- ・言語：カースト上位のブラーマン、チェットリのインド系の言葉であるネパール語が公用語。ネパール語はインドのサンスクリットが元で、バングラデシュのベンガル語、パキスタンのウルドゥー語も同類の言語だ。文字はヒンズー語とネパール語は同じ。ネパール人はインド映画をよく見ているとヒンズー語が分かるようになるという。言語圏として他に同じなのは、チンギスカンが広く制覇したことで西はハンガリーのマジャール語、フィンランドのフィン語まであり、東はチベット語、韓国のハングル語、日本語である。ネパール語は日本語の語順と同じだ。「食べてみる」、「見てください」の使い方は同じ。世話はセワ、宗教はダルマ、と言う。カトマンズ盆地に多く済むネワール族のネワール語はもっと日本語に近いという。目上の人、目下の人への言い方も日本語同様にある。各民族は自分の言葉があり、それに加えての公用語のネパール語を話す。
- ・宗教：ヒンズー教が80%、仏教が10%くらいでイスラム教徒も少しいる。仏様は多神教のヒンズーの神様のひとり。象の神様ガネーシュ、猿の神様ハヌマーン、破壊神シヴァ、人の名前にも付けられているビシュヌ、ラクシュミ、クリシュナ、ドゥルガなど多数。生き神様クマリ（ネワール仏教徒のシャキャ族の僧侶階級の初潮前のけが、病気の無い子）がいる。キリスト教が増えているが、低カーストの人にはいいのかもしれない。



生き神様クマリ



バクタプールのヒンズー寺院



ボードナート

- ・政治：1996年頃から地方を中心にマオイスト（毛派）が武力で弾圧し、果樹苗木屋の大地主も山の土地を全て奪われていた（10年以上?）。2008年、王政から連邦民主共和制に移行した。2022年秋に総選挙が行われ、インド寄りの党から中国寄りの党が主体の政権が変わったと聞く。中国の投資は圧倒的に多く、政治的影響も強いと思われる。
- ・仏様の生まれた国：ネパール人の誇り。これをインドと言われとネパール人はとてもがっかりする。今のルンビニが生誕地。ただしネパールという国は当時なかった。カトマンズのヒンズー教の聖地、スワヤンブナート寺院は、仏陀だけが祀られている。ボードナート、ブダニールカンタも仏様を祀る。
- ・お祭り：ヒンズー教の最大の祭りとして10月、11月にあるダサイン10日間、ティハール3-5日間がある。都会から両方の祭りのためにまとめて1か月休暇を取って村に長くいる人がたくさんいる。他にもインドラジャートラ等いろいろな祭りがあり、たくさん休む習慣は外資企業参入の壁のようだ。ネワール族が多くいるカトマンズ盆地では豊かな文化が栄え、いろいろな大きな祭りがある。



ティハール祭り



7月のガイジャートラ。

面をかぶって踊り、練り歩く。



姉妹、友人と再会



- ・カースト制度：インドと同じくヒンズー教で種族によるカーストの上下意識がある。アーリアン系のブラーマン/バフン（僧侶）、チェットリーが上位にいて、政治でも多いらしい。鍛冶屋、服修繕屋などは低く、食事と一緒にするのを嫌う。結婚も同じカースト間でのみされた。少しずつ違うカースト間の結婚も増えているようだ。上位のバフン等は、

農作業などの下位の仕事をしない。指示するだけ。日本人（アウトカースト）の私も農作業はせず、指導するだけ、と言われて残念だった。

- ・カーストによる食事制限：インドでは菜食主義が 80%だったが、ネパールでは最上位のバフンは山羊の肉だけ食べる。カーストが下がるごとに食べられる肉の種類が増える。ただしヒンズー教の神様の牛は食べない。ヒンズーの神である牛は食べないが水牛は食べる、豚は食べないが野生の豚は食べるということがある。
- ・断食の習慣：週に一日断食の習慣があった。私のいた家の家族はチェットリで、家族により断食の曜日が違っていた。ただし夕方、少し野菜を煮たものを食べていたようだ。住んでいた家のおばあちゃんは、それ以外に「今日は〇〇の神様の日」と言って断食をしていた。今でも断食をやっている人もいる。特に女性は。チベットから移動してきたチベット仏教とは別の習慣がある。
- ・食習慣：基本は1日2食、右手の素手で食べる。ダル（豆汁）、バート（ごはん）、タルカリ（野菜料理：カレー味）がネパール料理の基本。山の村では、母親が家族みんなに食べさせた後に一人で食べていた。午後にトウモロコシ、大豆を炒って食べていたが、こういった軽食を食事と数えない。今は都会ではモーモ（チベット風餃子）をよく軽食に食べるようになった。昔は朝 8-9 時に朝食、10 時から仕事で昼食なし、夕食だった。一回忌に去年参加したが、とてもおいしい菜食料理がたくさんあったが肉、魚、お酒はなかった。昔の村では、主食はヒエ（ディーロ）8割食べると、子供は白い米のごはんを少し食べさせてもらっていた。ヒエはまずいが体が強くなると言われる。1982 年頃の山村の結婚式の料理は米のごはんと肉がたっぷり出たが、ほかの料理はほぼなかった。昔、2週間メニューが変わらないことがあった。肉は年に数回、近所で山羊、鳥、水牛など屠殺した時だけ食べていた。また秋のダサイン祭りでたくさんの山羊をつぶして。ボジプールでは鳩、鶏を飼っていて、食べる時は男の子がつぶして、料理にしていた。なお、チベット仏教徒 2022 年で、殺生を忌み家畜を殺して食べないが、肉を買ってきて食べていた。



1年中トウモロコシを炒って食べた。



料理風景。



食事をする姉妹。

- ・会食：村にはカーストの違ういろいろな種族が住んでおり、あのカーストとはお茶も飲み

ない、とか、食べられる肉の種類も違い、村全体としても職場としても会食はやっていなかったと思う。村に二つ茶屋があったが、それぞれ行くコースが分かれていた。

- ・アルコール：飲まない人が多かった。私が村の茶屋で飲んで帰ると、おばあちゃんはとてもいやそうな顔をしていた。昔、村にはローカル種の四国ビエ（コード）の蒸留酒ロキシとアルコール分の薄いチャン、そしてトウモロコシのラム（強い）があった。昔、カトマンズで飲んだビールは泡が出なかった。山村にはビールはなかった。現在、ローカル酒のロキシ、チャンが正式には店で提供できないようだ。自宅によく作られるローカル酒に課税しにくいせいかもしれない。
- ・交通：ボジプールのバザールに行くには、ダランという町から歩いて二日かかった。カトマンズから飛行機便がある。雨季に入る時に4日連続で空港に行ったが飛行機が上空まで来て、曇天により着陸をあきらめる、毎日4時間そうして待たされ、結局町まで2日歩くことになったこともある。私は空港で何時間も日本の歌謡曲を歌って時間をつぶし、大勢のネパール人に囲まれていた。山の結婚式行列が村から村へ7時間歩いてあった。昔、おばあちゃんはカトマンズの寺院まで山越え谷越え7日かかりで巡礼に行ったそうだ。山の小学中学生が教科書を買いに、ダランの町まで往復4-5日かけて行っていた。今は村に車の道路が来たという。
- ・市：昔、山のボジプールのバザールで毎週土曜の休みの日に露天市が立った。数時間歩いて山羊を連れてきたり、竹籠に鶏を入れて持って来ていた。乾燥したタバコの葉の束を売っていた。市ではないが、外国から無償で届けられた衣類が売られていたりした。また年に一回とても大きな市がボジプールで催され大勢の人で賑わった。



鶏



タバコ



米



学校の子どもの使用後のノートを破いて巻いてタバコの葉の粉を入れ束にして売っていた。火をつけてもフィルターがなく、紙が燃えて煙を吸うことになる。

- ・生活：昔、村には電気、ガス、風呂、便所、水道、新聞などなかった。家には私が8万円で買った馬とその世話をする使用人（月2500円で炊事、洗濯、馬の世話、買い物なんでもしてくれた）、家族7人（子供4人）、牛（牛乳が取れる）、鶏（私の部屋の上をバタバタ）、犬、鳩（食用）、野菜畑、水田があり、毎朝眼下に雄大な流れる雲が見えた。なお、公務員の平均給与は1.5万円位で、青年海外協力隊の毎月の支給は220ドル（約6万円）で、アメリカ平和部隊は公務員と同額だったそうだ。水は歩いて数分の水汲場から桶で汲んできた。山の村には井戸はなかった。トイレは大きめの葉っぱを5枚摘んで斜面で草木に身を隠すようにして用をたしていた。トレッキングのガイドの話では数年前に彼の村で全部の家にトイレができた、と言っていた。時々水汲場で水浴した。女性は何人か集まって体中を隠す大きな服をかぶり、手の中に入れて石鹸で洗っていた。村の情報源はラジオでいつも流れる歌やニュースを大きくかけて流していた。新聞はなかった。今は村にも電気が来て、車の道路も来たという。携帯も使っていて、SNSで結婚相手を探しているという。カトマンズでも5年？ほど前まで停電が一日14時間ほどもあった。国の上の考えが変わった途端に停電がほぼなくなったという。
- ・儀式：ボジプールでは毎朝、母親か娘が土とレンガでできた家の部屋の土壁の下の部分と床を毎朝牛の糞を水に溶かして、バケツと雑巾で塗っていた。去年、キルティプールの新築の家にお邪魔すると奥さんは仕事帰りの夕方、まず部屋の中と家の外の4、5か所に花で小さな祭壇を作り祈りを捧げていた。私が写真を撮ろうとするとだめと言い、そして今日は断食の日だと言って、私にだけ食事を出してくれた。



ブラーマン（祭礼者）を家に呼び、お経を3-4時間あげてもらう。

葉で作った皿に御馳走など盛る。

- ・学校での瞑想：ある学校（幼稚園から大学）では毎週1時間瞑想の時間を設けていた。仏様の生まれた国ならではの、と思う。

- ・村の茶屋：毎朝、男どもは茶屋に雑談しに来ていた。一方、女性は朝から家事に精を出し忙しそうだった。私も毎朝茶屋に通い、村人とおしゃべりしてネパール語会話になれるのに役立った。ボジプールのバザールに、毎日片道上り下り1時間づつ、往復4時間かけてやってくる隣村の大根の種生産農家の人がいた。山の村の茶屋からはいつも雄大な山が見え、時には眼下に雲が流れていた。人々はいつも道路で出会うと、両手を合わせてナマステ、と言って挨拶をしていた。



毎日往復4時間かけ通う大根種子農家。家畜の糞でガス灯、ガスコンロも作っていた。

- ・結婚：田植え、稲刈りの時期を外して、そして年に6つの月だけで結婚式が行われていた。今は都会ではいつでも結婚するとも聞く。稲刈り後が結婚最盛期だった。15-16歳でたくさん結婚していた。今は村でも21歳くらいまで上がっているとか、SNSで知り合って結婚しているとか聞く。



左：16-17位で結婚 中央、右：村長の息子の結婚行列、山道7時間。標高1,900mにて。

昔は同じカースト間で結婚していた。カーストが異なると、上のカーストの人は下の相手のカーストに下がるとか、名字がネパールになるようだ。また従兄弟はダメとか近親相関にならないやり方であった。今でも別のカースト間で日本にいて結婚しようとして親が猛反対して諦め、同じカーストの人を探して結婚した人もいる。三日かけての結婚式は今もある。800人呼ぶことも。昔は嫁さんを何人も持つ人がいたが、今は制度上禁止されている。第二夫人で年に一回祭りの時に夫が来ると言って来なかったことがあった。職場の人の家に行ったら、二人の奥さんとそれぞれの子どもが2人と3人がいて、

一緒に同居していると言っていた。2022年、呼ばれて参加した結婚式では、数時間、誰でも気軽に踊り続けていた。山の結婚式でも踊りがあった。

- ・葬儀：村では人が死ぬと、その日のうちに担いで下の川に燃やしに行っていた。川向のライ族の村では土葬すると言っていた。昔、村を大地主と歩いていたら病気の若い女性が寝込んでいて、村人が集まり泣いていた。その村のまじない師（ブラーマンの僧侶）がもう助からない、と宣言すると、家族は食事を与えない風習があった。そこで大地主が食べさせれば治るからと進言し、その後元気になったようだ。去年、キルティプールに行ったとき、死人を担いでいく集団が歌を歌いながら行進しているのを見かけた。ヒンズー教徒は聖なる大河ガンジス川べりに人生の最後は住み、死んだらそこで燃やして流してもらうのが理想と聞いた。父親が亡くなった息子は、半年喪に伏し白い服装をしていた。また最近参加させてもらった葬儀では、ボードナート寺院で行い、息子は髪を短くしていた。この時は親戚だけで取り行っていた。
- ・一回忌：40年前の協力隊時代には遭遇しなかったが、2022年、カトマンズでボジプールの方の一回忌があり、たくさんの方が集まっていた。ブラーマンの僧侶5人ほどが黄色い服装で護摩を焚き、色とりどりの花や果物を飾り、経を何時間も唱えていた。食事は菜食でヨーグルトなど使って多種類で驚いた。なかなかおいしい料理だった。なお、肉、酒はなかった。



- ・長寿の祝い：76歳くらいの方の祝いを15年ほど前にパタンで行っていて、旅している私も呼んでいただいた。何百人も招待しているようで、広場で敷かれた板に座り、食事とお酒も振舞われ（ネワール族のやり方）、食べ終わると早々に立ち去るものだった。最近、30年ほど村の開発に尽力しているという日本人の方が、84の長寿の祝いをやってもらったそうだ。種族ごとにいろいろ習慣が違うようだ。
- ・平均年齢・寿命：昔は平均寿命が50歳少しだった。特に新生児、乳幼児の衛生面の問題からくる死亡が多かったことが影響していたようだ。昔、ネパール人も20歳まで生きれば、後は日本人と同じ寿命という話を聞いた。今は平均寿命は60代。インドは国民の平均年齢は28歳で、ネパールも同じくらいであり、今も子供が山の村にはたくさ

ん見られる。日本の全国民の平均年齢は48歳で、インド・ネパールは20歳も若い。活力があるわけだ。一方、カトマンズ近郊の新しい家が建っているようなところでも児童・生徒数が減っているという。理由は昔は家族で子供が4-5人いたのに、今は一人っ子が増えているせいだという。

- ・防犯：山の村でも窓や玄関の戸にがっしりと鍵をしていた。いろんな民族が住むからか。私の新潟の田舎では昔は鍵などかけていなかったが。街では外塀のある家は上にガラスの破片や有刺鉄線を塀の上に付けている。他民族が混在していることによるのか？
- ・医療：昔は村に病院、医者はいなかった。ボジプール郡にイギリスのボランティアの医師がいたが、薬の提供に限られていたようだ。バザールの老人が急病でヘリコプターを70万円くらいかけて呼んだが亡くなったそうだ。なんとその騒ぎに乗じて、泥棒が大金を盗んだという。村で大病になった人がいて、80万円の手術が必要と言われたが、村中で相談し、そんな大金は村中で集めようとしても集まらないから、死後の平安を村人で祈るだけにしよう決められたそうだ。私もネパールに来て、ポカラのある村に1か月滞在したが、栄養不足か足の皮膚に異常が出たことがある。私は昔2年間の協力隊生活後半におなかを壊し続け、ある時におばあちゃんがくれた虫下しを飲んだら長いサナダムシがお尻から出てきた。また帰国して細菌性赤痢と診断され、隔離病棟に1か月入院することとなった。医師には、こんなにたくさんの雑菌が体にいてよく生きていたねと言われた。今でも都会の金持ちは大きな手術はインドで付き添いを連れて1か月入院してやったと聞いた。



民族衣装の女性



ティハール祭で玄関前の飾り



- ・教育：昔、山の学校では、片道2時間歩いて通う子はよくいたようだ。そしてお昼の食事は取らない（ネパールは朝、夕の2食が基本だった）。学校に黒板がない、新学期が始まったのに先生にまだ教科書がない、という問題もあった。子供は家に机もなく、床に教科書を置いて、かがんで何度も何度も声を出して読んでいた。昔でも、都会から山の学校に赴任した先生があまりの村の生活の退屈さに耐えられず半年で辞めて帰ったという話もある。今も山の村ではいい先生を確保するのは難しいようだ。昔は就学率が5、6割で、女の子は学校に行くとしても半年行って字の読み書きができればいいという考えも結構あった。今は就学率9割とも聞く（2015年に義務教育になった）。現在、10年

生の中学卒業時、および12年生の高校卒業時に全国卒業認定試験があり合格率は7割もないらしい。2022年のトレッキングで出会った山の農家の女性は、旦那が病気で亡くなっても子供の将来のために、収穫したジャガイモなどを売って、子供5人をカトマンズの学校に学ばせていた。今、教育熱はすごく、二倍以上学費がかかっても、英語で教え、レベルの高いプライベートスクールで学ばせようとする。それは最後には外国でしっかり学び？稼いでほしい、それが家族が豊かになる道という考えかもしれない。しかしそれは若者が村を離れ、国を離れて家族の分断を招いているのではと懸念する。



ネワール料理：2022年シタール奏者宅で。豪華ネパール料理：ダル（豆汁）、バート（ご飯）、タルカリ（カレー味の野菜、肉煮込み）

- ・社会保障：健康保険、年金、介護保険、雇用保険は無きに等しいようだ、今も。公務員だけは年金があるようだ。公務員の勤務は30年間までの制限があるようだ。手術、入院では家や土地を売って医療費を出さないといけない。高額療養費制度など夢の世界。
- ・週休：2022年に週休5日制が導入されたが反対意見が強く、公務員だけの適用になった。土曜日が国民のお休み。
- ・外国への出稼ぎ・就労：国民の人口が3,000万人弱で、現在、毎日1,000人近く、年間20-30万人が中近東を中心に稼ぎに出ているようだ。一番多いのは高校卒業でなくても単純労働で行ける中近東・アラブ。ほかにインド、マレーシア、韓国、日本（在日12万人中、半分以上が就業）。外国に行ってそのまま移住している人は220万人ほどでこの10年で26万人増えている。



帰還したゴルカ兵が半年、農業研修を受けて地元に戻れるようイギリスが広大な研修農場を山肌に設けていた。（ダンクッタ郡バクリバース農場）

昔は山の村出身のゴルカ兵がイギリスにより 20 年くらいシンガポール、香港、UK に派遣されていた。協力隊時代に村を廻るとゴルカ兵時代の写真が飾ってある家をよく見かけた。ゴルカ兵はフォークランド紛争にも出掛け、また第二次世界大戦でビルマで日本兵と戦ったそうだ。

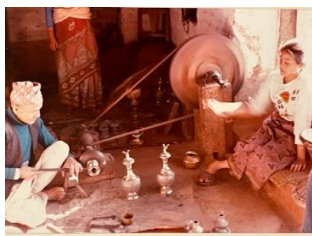
「おい、俺は日本兵と戦ったんだぞ、ビルマで」と元ゴルカ兵に山道で休んでいると肩をポンと叩かれ、にやりとされたことがある。インド兵としても多かったようだ。

去年会った男性は、フランスの軍隊で 10 年働いてきたとのこと。これはフランス語を一生懸命学んでのことでまれな例。イスラエルで介護で 15 年働いた女性、45 歳くらいでキプロスに介護で働き始めた女性もいる。出稼ぎ者はコロナで減ったが外国からの送金額は減っていないという。この送金が国を支えている国の GDP の 2 割以上。南アジアでも突出している。

カトマンズ大学の自動車整備士養成コースを 3 年間学ぶと、9 割はアメリカ、オーストラリアで仕事に就くそうだ。英語と技術があればどんどん欧米にいけるチャンスがある。大学卒業予定の IT 人材は世界から引っ張りだこだ。スイスはカトマンズに溶接技術などの訓練校を立て、1-2 年の訓練後にすぐスイス企業で働ける道を作っている。日本も出遅れてはいけなと思う。日本語の壁という大きな障害も立ちはだかる。

・ボジプール郡の産業

ネパールでは手で食事をつまんで食べる。その際に手を洗ったり、水を飲むのに水差しを使う。その水差し（カルワ）を山のネワール族の村で特産品として作っていた。またククリという腰に差している小刀も特産品らしい。ダランの町から歩いて 2 日、40-50 kg 担げば 4-5 日かかる山の村での特産品ということに驚く。ほかは柑橘くらいか。



- ・留学：今では、ネパールではネパール語の授業以外は、全科目、英語で教える私立学校が多く、また人気がある。英語で教えることができるネパール人教師が豊富にいる。公立の学校でも英語が併記された教科書が使われていたりして、英語力が高い。そのため留学先には、英語圏のオーストラリア、カナダ、イギリスが人気がある。オーストラリアは結婚していればパートナーも住めるようビザを提供する。日本は漢字など日本語の大きな壁があり、また就職にも日本語が相当なハイレベルが要求され、給与水準も欧米より落ちており、円安もあり、魅力が薄れている。日本の大学の世界ランクが高くない、

とも言われた。それでも日本語学校はネパール国内に 300 校もある。日本語を半年も教えて、日本の日本語学校に入れたり、技能研修や特定技能で日本に行ければ、送り出し機関は一人当たり 10 万円ほどももらえるので、産業としての魅力があるのだ。まだ日本にあこがれる若者がいるうちは有難いことだ。留学にあたり、親戚など多くの知り合いからお金を 150 万円ほども高金利で借りて、エージェントに高額な料金を支払い、日本でまた授業料と生活費を払い、バイトをして大変な苦勞をしている。借金返済の悪夢に追われるように。一生懸命学び、バイトして借金も返し、4 年制大学を終え、やっとあこがれの企業に就職が決まったのに、数年前のバイトのし過ぎの罰則にひっかかり、帰国させられた人もいる。日本は漢字・日本語という壁があるなかで高度人材、特定技能人材の獲得にもっと門戸を広げるべきと思う。

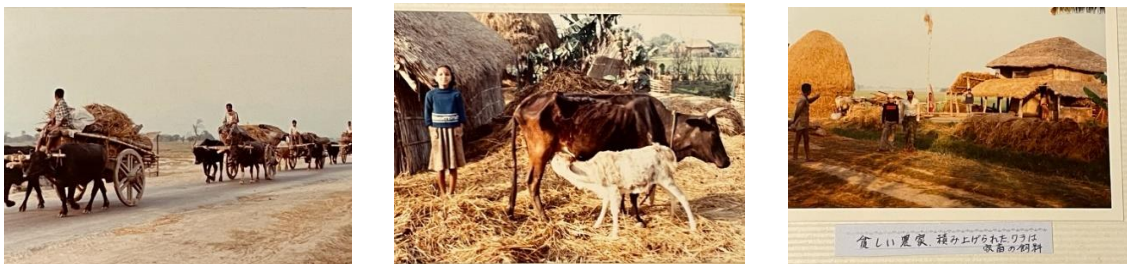


ボジプールキャンパスのサリー姿の女学生たち ボジプールのガールズスカウト (1982 年)

- ・外国との関係：一番文化的に近いのはインド。最近ではテレビでインド映画を見る人は非常に多い。言葉もとても近いので映画を何度も見ていると言葉が分かるようになるという。結婚式で数時間の踊りの音楽もインド音楽が半分。同じヒンズー文化。投資は昔は日本が多かったが、今は、中国 50%、インド 25%、米国 4%、韓国 3.5、日本 0.9。貿易相手は、インドが 7 割ほど。中国から輸入 15%。日本はわずか 0.5%。携帯電話は中国、韓国製品が圧倒的に多い。サムソンの携帯ショップが街で数百メートルに一店は見かけた。ホテルにあるテレビは韓国製がほとんどだった。パソコンは中国、米国。タクシーはほとんど韓国のヒュンダイ製である。バイクは半分日本製でインド製も多いが、日本製は 3 倍の値段。車は輸入すると関税で 3 倍の価格になっている。車はインド製、韓国製が多く、日本車は高いが割合ある。チベット、中国に通じる道路もできていて、チベット系の種族はビザなしでチベットに行けるそうだ。中国語を教える教師を無償でカトマンズ等の私立の学校に派遣する、という話が学校に来ているようだ。
- ・日本との関係：昔はネパール人に日本が経済で世界一、と言われ、歩いていても日本人と呼ばれたが、今は中国人？韓国人？と声を掛けられる。今、日本からの企業進出も国の援助も少ない。国の援助を大きくしないのは国の政治が安定していないためとも聞く。インドには日本のスズキの自動車が大きく進出しているが、ネパールには工場進出企業はほとんどない。またインドの方がネパールより賃金が安いとも聞いた。いずれにして

も中国の援助は今は大きく、中国、韓国から電気製品などが圧倒的に入り込んでいる。ヒマラヤトレッキングなど観光に来る日本人がとても少なくなったと言われる。また来ても 50 歳以上の年寄りばかりだと。トレッキング等観光客は欧米以外に、アジアの韓国、中国、インド、マレーシアなども増えている。ネパール人は日本からの投資、援助、観光客をととても期待しているが、日本の力が試されている。

NPO が日本からいろいろ入ってきている。またネパールの仏教研究者が日本の仏教を視察に来て、日本にあるいろいろな宗派はみなネパールにある、と言っていた。歴史的にネパールから河口慧海等を通じ日本に仏教が伝わって来ていて深いつながりがある。



1982 年頃：インド国境の平野部タライ（広い道路はロシアの援助でできた）の農村。

- ・土地、家、物価の急上昇：土地はカトマンズで 4 年で 2 倍、地方都市で数十年で 100 倍にもなったそうだ。昔、カトマンズはリキシャがのんびり走る小さな農村的な町だった、それが、カトマンズ盆地に田畑が消え、住宅ばかりになった。道路もいつも渋滞している。でも夜 9 時には街の道路は閑散となる。物価は 6 年で 4 割上昇。最低賃金は 1.5 万円ほどになったという。カトマンズのホテルでコロナ前に 1.5 万円程で雇っていたのが最近では 4 万円位でないと働かない、というようになったそうだ。

・農作業風景



代掻き、田植え：40 年前（標高 1300m ほど）



稲刈り

昔のカトマンズ近郊の水田風景
(今は住宅が立ち並ぶ)キルティプール果樹試験場での
果樹苗木の接ぎ木作業

- ・ネパールにあって、日本にないもの（私の見聞・理解に基づく：2022年時点）
- 標高 5000m まで一般登山客が歩けるトレッキング道。ヒマラヤ 8000m 峰。
- トレッキングのホテルでのベッドルーム（日本の雑魚寝式はない）。
- トレッキング宿での WIFI の完備（日本の山小屋では十分でないようだ）
- 三日間の結婚式。結婚式での大勢の数時間の踊り。死亡当日の葬式。
- 生け神様、クマリ（カトマンズとパタン。サキヤ族の初潮前の子が選ばれる）
- 毎週の断食の習慣（行う人は減っている）。お酒、魚肉のない一回忌の料理。
- バイティカ（兄弟姉妹が揃い、姉妹が兄弟に祈りの儀式を行う。）
- 学校始業時の全校生による国歌斉唱。
- 公立学校での 1 か月位の休暇（秋のダサイン祭 10 日間～ティハール祭 3-5 日間）
- 公立学校の教科書（化学等）で自国語と英語が併記されていること。
- 多くの私立小学～高校での全科目英語による授業。
- 全国統一中学（10 年生）、高校（12 年生）卒業試験。
- クリケットでの盛り上がり。
- カトマンズでのバイクによるタクシー（安い。アプリ呼出し。二人乗り）。
- インド製のバイク、車。
- バイクでの 3-4 人乗り。（小さい子供が間に入る）
- 乗合ジープ（遠距離で）。乗合タクシー。
- 40 年前に有名だった歌がいまだに国民的愛唱歌であること（レッサンフィリリ）
- 誕生日のお祝いは本人が友人たちにプレゼントや食事を振舞うこと
- 親の土地の相続は長男でなく、一番下の男の子が相続する



苗木屋のあるピャウリ村からのマカルーヒマールの眺望

・ネパールにないもの（私の見聞による）

地下鉄。特急電車（鉄道は 2022 年に南部平野部で始まった）。

高速道路。トンネルのある道路（第一号建設中）。

バスの時刻表（市内）。

軽自動車。関税の低い輸入車（関税が 200% のため日本車価格が 3 倍になる）

車で助手席のシートベルト義務化。バイクの同乗者のヘルメット義務。

健康保険（少しだけ？）、高額療養費支給、失業保険、介護保険。

年金（公務員だけある）。公務員の 30 年以上の勤務。

民間の週休二日制。フレックスタイム（多分）。公立学校の週休二日制。

学校（公立）での音楽、体育、美術の授業。学校での生徒による掃除。

楽譜。西洋楽器店での音楽教室。吹奏楽団・オーケストラ。

海。野球場。スキー場。競馬・競輪・ボートレース。

発泡酒。コンビニ。固形のカレー粉。

全国的なクリスマス商戦。西暦の年末年始の行事。花火大会。

日本製 PC の部品（ほとんど米国、中国、韓国製）。日本製携帯電話。

いじめ、孤独死（たぶん）。電車飛込。鍼灸。

該当する表現：いただきます。ごちそうさま。すみません（ちょっとしたことで）。

・ネパールの素晴らしいと思ったこと

親を尊い、先生を尊敬すること。（日本で先生に反抗する、ということがあり得ないと）
家族、親戚のつながりが深いこと。

（ネパールに行くというと、家族にたくさんのお土産を持っていくよう依頼される）

日本人に対し、少し親しくなると、自宅に招いて御馳走してくれることがよくある。

非常に多くの若者が外国の大学に留学、就労にチャレンジする。（多大な借金しても）

ネパールでも日本でも独立開業心旺盛。

・ネパールでの驚きの体験、話（40年前）

1) のどかな案内：

ポカラでまだホテルなどわずかしかない頃、歩いていて出会った男の子が4時間いろいろ案内してくれて、お金も何もねだらなかった。

2) 小麦こがしの粉だけの食事のポーター：

1979年のランタントレッキングで、3-4日荷物を担いでくれたポーターは、食事は自分で袋に持ってきた小麦こがしを水で練って食べるだけなので、おいしいか聞いてみると、おいしいと言ってニコツとした。また4600mの雪の峠越えにポーターが裸足のままでは無理だろうと思い靴を用意してあげた。



3) 村中探しても卵が足りない：

協力隊の1か月の語学研修でポカラの農家にいた時に、家族に卵どんぶりを作ってあげようと、家族7人の2倍の14個の卵を集めてもらうように子供にお願いしたが、村中の家を廻って7個しか見つからなかったそうだ。自然養鶏しかなく。

4) Japan is Number 1 と信じていた子：

研修先の子は、日本はアメリカより経済力で強く、世界1と信じていた。1981年。

5) 硬すぎて食べられない干し肉：

その家のいろりの煙でいぶって作った干し肉を戻して料理したものを食べようとしてどうしても硬くて食べられなかった。栄養不足か、1か月で足にできものがでてきた。

6) 茶屋で無料会話授業：

村の近所の茶屋に行くと、いつも茶屋の主人がネパール語を気さくに教えてくれた。

7) 字が読めないポーターたち：

協力隊で山の任地の村に2日間歩いて到着した。その2日くらい後に私の荷物を運ぶポーター数人がたどり着いたが、みな文字を読めなかった。立派な体格ながら。

8) 人が石を割って道路を造る作業：

ダクッタにダランから1日かけて歩く山の道に、車道を造る時、若い女性労働者がトンカチで石を割って砂利にしていた。どれだけ時間がかかるのかと思う。

9) 鶏冠が料理に：

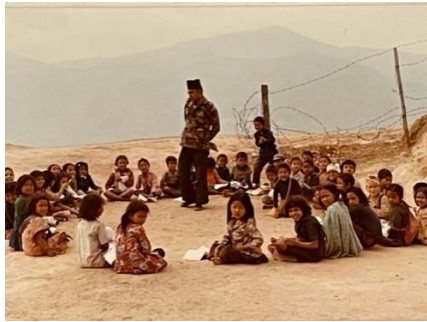
柑橘試験場で、夕食に鶏の鶏冠のついた頭と、三本の指の付いた足の料理が出された。試験場の研究者はみな単身赴任で、何人もがロシア留学経験があった。

10) 2時間徒歩通勤で昼飯なし：

柑橘試験場で働くある人は、片道2時間山を越えて通っているが、食事は朝晩の2食で、お昼は水を飲むだけ、とのことだった。

11) 校庭で輪に坐っての授業：

村の学校で、晴れの日、外の校庭で児童が丸座になって授業を受けていた。



12) 庭で毎日大きな輪になったのティータイム：

カトマンズの農業試験場の外庭で毎日40人ほどの職員が輪になって座り、紅茶とビスケットのほのぼのしたお茶の時間を過ごしていた。

13) 農業支所での会議での発言：

ボジプール郡の各地で農業指導をする指導員が毎月20-30人農業支所に集まり会議をしたが、よく3人位が同時に俺の話の聞けと声を張り上げていた。

14) 出産時の母親の死：

毎日通っていた茶屋の奥さんが子供を産んだ時に亡くなってしまっていて主人はさみしそうだった。産婦人科医も産婆さんもない、山の村は医療が不足していた。

15) 山羊を連れたピクニックで火を熾して：

山の村で7-8人で山羊を1匹連れてピクニックに山の斜面の林に行き、火を焚いて山羊を料理して食べた。料理前に山羊の脳みそを生で私にくれて、食べた。



16) かぼちゃの蔓を煮て牛も人も食べる：

山のボジプールで、雨季にかぼちゃの蔓を大鍋で煮て牛に食べさせていた。乳の出がよくなるそうだ。人もかぼちゃの蔓を煮て食べた。大変な食生活と思った。

17) 山村で巡回用に馬を買う：

私が山村の水で腹を壊すので、村を巡回するために馬が必要になって、村の人が1

週間かけてあちこち廻り 8 万円で探してきてくれた。公務員給料 1.5 万円程の当時。

18) 馬が夜中にトウモロコシ畑を食い荒らす：

その馬と遠くの村に 2 日かかりで行く途中、峠の茶屋で泊ると、夜中に馬が畑のトウモロコシを食い漁り、翌朝、店の主人が激怒していて、お金を払って謝った。

19) 1 日 1 食の土地なし農民：

村には土地を持たない小作農家がいる、その人たちは一日一食しか食べられず、可哀そうで涙が出る、と家の人が言っていた。



大地主の苗木屋に一家住込みで働く。月に 2000 円。： 40 年前

20) ミカンを 4 日担いで売りに行く：

標高 1,500m 程以上のミカンが採れない所に住む村人は、ミカン農家の木に登り、収穫し籠に担いでダランの町に 4 日かけて売りに行っていた。途中買ってくれる人がいればどんどん売る。今は車で山の村に行ける。

21) 屋根と柱だけの 2 階建ての宿：

ダランの町に二日歩いて行く時に、途中一泊する宿があるが、柱と薄い屋根だけで壁など一切なく、満天の星と月を仰ぎながら寝た。たまたま道中一緒になった者同士で二日間歩くと、今度家に遊びに来て、とお誘いを受けた。

22) 舟かロープでの大河渡り：

その道中、ヒマラヤから流れ下る大河を渡るが、橋はなく、長いロープがかかっているだけで、滑車の付いた箱に数人で乗り、エイやと崖の片岸から真ん中の少し先まで滑り降り、それから手で別のロープを引っ張り上がって対岸までたどり着くというものだった。渦巻く激流の上を。乾季には舟で渡れたが大勢で危ない。



ヒマラヤから流れるアルン河を舟で渡る。泳げる人はいない。水嵩の多い雨季（6-9 月）はロープで。



1980年頃、吊り橋もできてきた。アルン河の激流の上。揺れて長く怖い。

23) 神様扱い：

山の村にミカンの栽培指導に日本から来たという、はじめ村人は心から有難いと感謝の言葉を述べた。村の農業には、堆肥作りがなかった。牛の糞を果樹の木の根元に4-5個置く程度だった。無農薬、無剪定のまさに自然農法。果樹は種から苗木を作り、接ぎ木での苗づくりはなかった。

24) 他人の食べ残し：

上り下り歩いて2時間の村の大根の種子農家の家に泊まった。夕飯で私が家族全員の大鍋の料理に最初に手を付けてしまい、それで家族は何も食べられなかったと後で聞いた。大鍋料理に直接手を付けたはずはないが、ネパールでは人が食べた残り(ジュート)は口にしないという習慣がある。毎回少し残して犬にあげていたが。

25) 毎朝30分下つての水汲み：

ある山の上の村に行くと、ミカン(ポンカン)の木が高さ8mにもなっていたが、村人は毎朝、家畜も連れて30分下つて水汲みに行く必要があった。重労働。

26) 木の葉っぱが唯一の料理：

乾季が10月から5月まで続きその後半にライ族の村に行き、学校の先生の下宿に泊めてもらったが食べられる野菜がなく、木の葉っぱを取って炒めて食べた。

27) 感動！町の電気の灯り：

村から2日歩き、1日バスに乗って峠を越え、夕方カトマンズの街の灯りが見え、感動した。あ、電気の灯りだ、と。

28) 新築での生贄の儀式：

家の新築の儀式で、真新しい柱に向かって、山羊にまたいで山羊の首をククリ(鉈)で切って鮮血を柱に飛ばしていたこと。

29) 水牛の屠殺、解体、肉と血を分け合う：

村の近所の5軒ほどで、水牛を屠殺、解体し、肉と血を分け合う場面を目の前で見た。水牛に餌を食べさせておいて、首に大ナタを打ち下ろし、湧き出る血を洗面器に取り、分け合う。肉は天秤で測って平等に分け合う。長い腸には消化前の草がたくさんあり、それを手でしごいて出した。血はどう料理したのだろう。

30) 外国のボランティアとの出会い：

ボジプール郡の山の村にいても、アメリカンピースコー（平和部隊）、イギリス医師たち、ドイツ、カナダのボランティアに出会って、ネパール語で話した。日本語とネパール語の文法が同じせいか、日本人の自分の方がネパール語になじんでいた。

31) アメリカ平和部隊のパーティーで歌う：

アメリカ平和部隊 150 人ほどのパーティーがカトマンズのビル屋上であり、太鼓のタブラ奏者とインド舞踊の夫婦に連れられて参加した。私のネパールの歌も大喝采を受けた。



40 年前

32) トイレの最近の普及：

昔はボジプール郡でトイレがある家はなかった。今は国全体として 95%が何らかのトイレを利用しているとのことだ。水洗はまだ少ない？

33) 私の使用人：

2 年の協力隊の任期が終わり村を去ろうとする時に、私の馬の世話と食事、買い物、洗濯、遊び相手と何でもやってくれていて、月謝 2500 円ほど（協力隊の月の支給は 220 ドル＝6 万円程）で雇っていた 16-17 歳の使用人に、なんとかもう一年いてくれないかと懇願された。私がいなくなると稼げる場所が村ではなかったのだろう。乾季には馬の餌の草刈りに 2 時間もかかっていたが。雇い始めるとまず布団を買ってあげた。彼はすぐに土壁と土の床の部屋に煮炊き用のコンロを粘土をこねて作り上げてくれた。

34) 山の村から国連職員がでた：

このような山の村ながら、私が住んでいた家の長男は優秀で、国連職員のアジア代表として日本人候補に面接で勝ちニューヨークで 3 年勤務し、帰国後にネパール警察 7 万人のトップ 2 となった。山の村に祭りで帰って来た時にチェスをやったが負けてしまった。次男は跡継ぎでネパールの企業の取締りになり、次女は夫と共にアメリカで会社勤務している。ネパールでは跡継ぎは長男ではなく一番下の息子が跡継ぎとなる。

また、村から国会議員で立派な実業家になった人、東京でレストラン経営で成功している人、息子がアメリカの博士課程に学ぶ、など輩出している。電気もガスも水道もなく、町から 2 日歩く山村の人々でも、先進国の日本などと能力は変わらない

いのだと思った。

35) 世界一いい国と思っていたネパール：

ネパールではいつもおなかを壊していたが、帰国後ずっとネパールほどいい国はないと私は言い続けていた。その後、東欧諸国出張でウィーンの美しい街を見て感動して変わりはしたが。

36) 一番おいしいと思ったネパール料理

協力隊から帰国して 20 年ぶりにネパールに行き、ボジプールで一緒だった家族にカトマンズで再会し、その家でいただいたネパール食、ダルバートタルカリは、今まで食べた食べ物で一番おいしい料理だと思った。

・ネパールの驚きの話（2022 年）

- 1) 「ネパール人はみんなネパールが楽しくて、帰って来たいんだよ」と日本に 10 年いて、大学で学び、企業で働いた人が言っていたこと。私は日本の方が住むにはいいだろうと思っていたが。ネパールでは、いろいろなお祭り、結婚式があり、家族・親戚・友人とのつながりが深く、寂しくなることはなさそうな社会だ。あたたかい人間関係、交遊、それがネパールの魅力か。ネパールは、2-3000 年前から口づてに伝わるラーマヤナ、マハーバーラタという抒情詩にある道徳、信仰心がこのようなやさしく穏やかな社会を作り上げたのか、と自分なりに思う。
- 2) 昔、5 歳位だった子に 40 年ぶりに会ったら、イスラエルで 15 年間介護の仕事で働いてきたと言う。結婚し子供が生まれた直後に、言葉も習わずに行ったそうで、5 年に一度ずつ帰国して娘に会えたそうだ。その弟はアメリカに奨学金で留学し経理の仕事でフロリダで働いているという。オンラインで IT を学び、IT に転職希望だそうだ。その兄はネパールの山間部で水力発電技術者だ。
- 3) アンナプルナのトレッキングでポーターは 48 歳で家族 8 人。45 位？の奥さんが 3 年前からキプロスに介護で働きに行っているという。その年齢から外国にひとり女性が出稼ぎとは。二人の収入で家族 8 人なんとか暮らしているそうだ。ポーターで 50 kg 以上毎日担いでいたが体が大きく年で膝が痛いと言う、これからの仕事人生、大丈夫だろうか。
- 4) チトワンで外国への人材紹介業と日本語学校を運営している人は、イギリスで経理の仕事をしていたが、ネパールの父親が半身不随となり、世話するために仕事を辞めて帰国したという。ネパールに介護保険や施設、健康保険がないため、そうするしかなかったようだ。妻と子供はイギリスに残し、子供はイギリスでの教育を受けさせるとのことだった。

*外国人労働者が多いアラブ首長国連邦（UAE）、そしてドイツに学ぶこと：

ネパールに行く飛行機乗り継ぎで UAE のアブダビ空港に立ち寄ると、たくさんネパール人がいたが一人、空港で警察業務をするネパール人に会った。ネパール警察から派遣され 3 年勤務しているという。UAE の人口は現在 1,000 万人弱で、アジアを中心とする外国人労働者が 85%ほど占め、自国人は 15%程度しかいない。カタールのサッカーワールドカップで外国人労働者への人権問題の話があったが、UAE は 85%もの外国人を受け入れて先進国となり国を発展させている。そして石油収入には 15%ほどしか依存せずに発展している。日本では若い労働者も IT 等高度人材も不足していて経済が停滞して久しいが、アラブ諸国のように大胆に外国人を受け入れて発展している国を見習うところは大きいのではと思う。

また、ドイツでは早くからトルコ人労働者を受け入れ、歴史的に難民も多く受け入れ、それも都市ごとに外国人を同率で受け入れる体制だ。それがイノベーションの源となり、ファイザーのワクチンも元はトルコ移民によるようだ。人口の都市集中、地方の過疎化も日本より少なく健全であるようだ。日本も世界に門戸を開くべく学ぶことは多いと思う。

ヒマラヤを望むガンドルック村でティハール祭に遭遇：2022



ティハールの踊り：朝 7 時から



アンナプルナ、マチャブチャレのヒマラヤ。

ティハールの踊り：夜 10 時まで



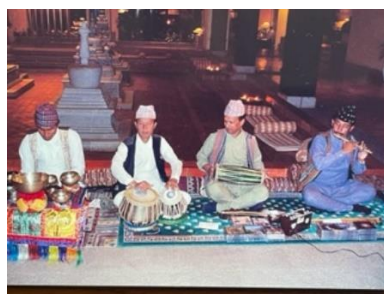
ティハール祭 (ガンドルック村) : 2022



チトワン (タライ平原) のティハールの踊り : 2022



インドの楽器シタールの奏者



左から：金属器楽器 (擦って音出し)、タブラ (小太鼓)、
マーダル (首掛け太鼓)、バーンスリ (竹笛)



カトマンズ近郊 (ダサイン祭にて) : 40 年前



カトマンズ近郊 (ダサイン祭にて) : 40 年前



F UJI ホテルにある曼荼羅。

ひとりの絵師に依頼し、1年間で約50万円で作成されたと言う。